

まい・ぱ・れぜん

ベトナムと協働して 日本の技術力を承継する

第二の創業とベトナムへの第一歩

弊社（協三工業株式会社）は昭和15年2月1日に創業、福島県福島市に本社工場を置き、鉄道車両・各種クレーン・諸機械・橋梁等の、鋼構造物を製造しており、今年で76年目を迎えています。

平成17年4月8日、創業65周年の節目に、「新たな気持ちで、最後まで諦めずに挑戦しよう」と、この日を「第二の創業日」と位置づけ、以後、社員一丸となって取り組んでまいりました。

そんな折の19年10月、金融機関主催の、日本からの進出企業を対象としたホーチミン市を中心とする視察旅行に参加したのが、私のベトナム社会主義共和国訪問の最初でした。ベトナムの若さと、内に秘めたエネルギーの大きさに、驚きと感動の念を持って帰国したことを今でも鮮明に覚えております。その後、ベトナム人の知人を介して、経済産業省や国土交通省、あるいはベトナム投資局等の方たちと接する機会があり、皆さんから「ベトナムはこれからです。今後はベトナムの将来を見据え、国家として裾野産業の育成を図っていかねばなりません。是非、物づくりの技術を指導してほしい」等のお話を伺いました。

弊社は、小型のSL・DL^{*1}をはじめ、高速鉄道車両の台車製作など、高度な溶接技術を前面に掲げ、物づくりをしています。私は常日頃から「物づくりは人



加藤 守 (かとう まもる)

協三工業(株)代表取締役社長

福島県二本松市出身。1967年福島県立安達高等学校卒業後、公務員を経て、95年協三工業(株)入社、取締役総務部長。2000年に代表取締役社長に就任、現在に至る。



ホーチミン市にある国営造船所にて

※ 1 SL・DL

SL (steam locomotive) 蒸気機関車。

DL (diesel locomotive) ディーゼル機関車。

づくり」と思っておりますので、時間はかかるが出来るところからやってみようと考え、ベトナムの職業訓練校へ社員を講師として派遣し、まず、訓練生に対する溶接技術の指導を始めました。

25年8月、ベトナム・ハノイ市に現地法人を立ち上げると同時に、訓練生の中からベトナム人8名を社員として採用、3カ月間、本社で実務研修を実施しました。現在は、ホーチミン市にある国営造船所で、船舶の一部製造を受け持ちながら、物づくりを実践しています。併せて、ベトナム人の鋼構造物製造管理技術者を育成すべく、弊社から社員を派遣して、現地の製造管理技術の向上に向けた指導に取り組んでおります。

東日本大震災・福島第一原発事故の発生

17年の第二創業日から、10年という月日が経ちました。この間、リーマンショックによる経済的な打撃や、23年3月11日の東日本大震災、それに続いての福島第一原発の事故など、弊社は、他の地域では到底経験しないような出来事に遭遇し、その影響の中での対応を、現在も余儀なくされております^{※2}。

とりわけ、労働人口の減少については、他人事ではありません。弊社の将来にとって、技術の承継等に関し、極めて深刻な問題になるのではないかと、危惧しております。

ただ、弊社は、震災以前からベトナムとの交流を続け、現地法人も設立し、ベトナム人の技術者の育成を試みておりますので、今後この関係を相互に生かし、手を携えていくことが出来れば、物づくりの環境が良い方向に向かい、技術の承継につながっていくのではないかと、期待しているところです。

これからが本番—急がず焦らず気負わずに

これまでの取り組みの中で、弊社がベトナムとの技術の架け橋となるのには力不足のところもあり、また、考え方の違いや生活習慣の違い等もあります。私は、ここ数年、月一回くらいの割合でハノイ市やホーチミン市を訪れていますが、なかなか思うようには事が進まず、まだまだ道半ばです。それでも、ベトナム人の社員の中で、二人目の子供が生まれたり、結婚し家庭を築こうとしている者がおりますので、こちら側が責任を自覚し対応を間違わなければ、自ずと方向性が見つかり、前に進んで行くことが出来るのではないかと思っております。

急がず焦らず気負わずに「次の世代に引き継ぐことが出来れば良し」との思いで、私自身これからも健康に留意し、ベトナムの皆さん方と一杯やるのを楽しみに、老体に鞭を打ちながら頑張っていこうと思っております。今日この頃です。



本社での実務研修のベトナム人訓練生と（平成26年1月）

※2
協三工業(株)では、自社の技術力を原発の事故処理に生かし、廃炉作業を進めるための技術・機材の開発に取り組んでいる。